踏　み　跡　＜ My mountains ＞

中央アルプス	しらび平から千畳敷・木曽駒・北御所谷	No.084

最初は恩田を中心に計画が組まれていたが、最終的には吉野と私の二人だけの春山合宿ということになった。今年の冬山で一応曲がりなりにも南アルプスの3000m峰に到達することができたので、この中央アルプスの春山はちょうど良い復習の場になるはずだとの目論見の山行。

昭和42年4月28日 ＜出発＞

残業になってしまい、前回同様に出発から躓き。急行上高地に乗れず、満員の急行穂高に辛うじて乗車というスタートとなった。（都内～駒ヶ根　急行で 1,240 円）おまけに小雨の中の出発で、前途は明るいものとは思えない。通路に座って夜食のパンを食べているうちに列車は発車。通路に並べられたキスリング（勿論他人のもの）の上に横になり貪るように仮眠。

昭和42年4月29日 ＜駒ヶ根→中御所谷入口＞

数時間眠るうちに背中が痛くなってどうにもたまらずあきらめる。1,240 円も払ってこんな格好で寝なければならないのかと思うとげっそり・・・でもまた、うつらうつら・・・。電車の急行は暑くてたまらない。
辰野 4 時 20 分、飯田線に乗り換えても相変わらずの混雑。発車前の車内で駅弁の朝食。
今日は天皇誕生日であることを突然思い出した。向こう側の扉の近くにいる数人の中に見覚えのある長身の男を発見。よくよく観察しているうちに赤河原の丹渓山荘の若旦那であることがわかり声をかけてみたら、後輩を連れて来ているとのことだった。三月に山小屋で会ったことを思い出してくれ、「駒を無事越えられたんですか？ あの時は遭難事故もあって・・・・」などなど懐かしき会話。若旦那達はほとんどの乗客とともに伊那北で下車して行った。
駒ヶ根5時35分、下車したのは10人程度。バスを待つ間にベンチで又一眠り。小雨の早朝、駒ヶ根は深く静まり返っているが、駅の中だけは売店の人、駅員、それに我々、もう生き生きとした空気が漂っている。
バスは 6時 50分発。駒ヶ根鉱泉、萱の台と通り抜けて大田切発電所に7時30分に到着。
ポンチョで蒸されながらの行軍でまったく冴えない。時々広げる地図はいつしか水滴で柔らかくなってきた。取水口で一本立てた後さらに一時間半ほどで幅広い道は終わり、目の前に建築中のロープウェイ駅が現れた。既に鉄塔も建っているが、二ヵ月後に開通するという話とは裏腹に工事現場は荒れ果てていて、しかも人の姿も見られない。ここは海抜 1692m、ロープウェイができれば 2640mの千畳敷まで8分で行けるという。文明の力にはかなわない、今我々の足では間違いなく一時間半以上はかかるだろう。
10時25分、駅舎の下に潜って雨を避けて昼食。12時10分に出発。
さて出発せんと腰を上げたが千畳敷に向かう中御所谷ルートの入口が見つからない。ロープウェイ工事のためそこかしこが削られ散らかされてさっぱりわからない状態になってしまっている。約二時間あせりの時間を過ごした後、ようやく工事用リフトのやぐらの下にある崩壊地の奥にルートを発見したが、既に14時を過ぎ

ている。これから登っても、ベストウェイでも千畳敷へは16時過ぎになってしまうに違いない。気象通報を聞くことができなくなってしまうという単純な理由で、本日の行動はこれで終了ということにした。今日がこんな天気だからこそ気象通報による明日の天候の予測が大事なのだ。
高床の駅舎の下にツェルトを張って、15時40分から食事。雨は上ってきたが谷間でラジオが聞こえず、結局天気図を描くことはできなかった。運を天に任せて17時30分就寝。

昭和42年4月30日　＜中御所谷入口→千畳敷＞

3時起床、良い天気が期待できそうな空模様。雲海から顔をのぞかせた北岳、間岳、農鳥岳、塩見岳が朝の眠気を覚ましてくれた。朝食後景色を眺めながらゆっくりパッキングをして4時30分出発。
小尾根を巻いて中御所谷に入り、目の前の日暮の滝直下を横切り右岸の尾根へ。木梯子の連続で苦もなく高度を稼ぐことができる。やがて中御所谷は雪に埋まるようになったが、残雪の下の水の流れを考えると雪の上を歩いて行くのはいささか恐ろしい。ルートは沢から離れて右岸の踏み跡に変更。
標高　2000m付近から踏み跡は途絶えがちになり、さらに100mほど登り赤布を発見したがこれが最後の赤布で、その内に踏み跡も消え失せてしまった。目が痛くなるような直射日光の中で中御所谷に沿った小尾根とケーブル鉄塔とを目安にラッセルとトラバースの連続。
NO.5 の鉄塔の上で、行く手に千畳敷カールのモレーンらしきものが視界に現れてきた。モレーンの直登を避け、さらに雪崩を避けるため極楽平の直下につながるであろう小尾根を登りつめることにした。この小尾根からの眺めは実に素晴らしい。右手の伊那前岳の大きさはさることながら、左手（南）の方に宝剣岳以南の山々が連なる。中でもとりわけ桧尾岳、濁沢大峰の貫禄は目をみはるばかりである。雪が柔らかくなった稜線で昼食をしながら中御所谷を見下ろすと、数人のパーティが谷沿いのルートを下って行くのが見える。我々はどうして谷沿いのルートを見失ってしまったのだろうか、考えるにつけ悔しくて残念である。

甲斐駒を筆頭に南アルプスの3000m前後の山々の連なりが半時の食事の時間でさえ目を退屈させない。
そして富士山が塩見岳の横からチョンと顔を出して、これこそ中央アルプスならではの眺め。
これらの山々もみな2500m付近より上はまだ真っ白。右手の伊那前岳を高さの目安にして、雪崩やすい雪稜をプッシュステップでゆっくり・ゆっくり。前方に小さくはあれ雪崩を見つけたときは一瞬ひやりとした。小さなものだったが、5分ぐらい流れ続けていた。
（左写真：桧尾岳と熊沢岳　手前は濁沢大峰）
南に空木岳が見える頃になると、宝剣岳の突起が手にとることができるようになってきた。恩田が言うように狭い頂上で、本当にタンコブのようにしか見えない。右下は千畳敷の大カール、カールの底に千畳敷山荘の赤い屋根。落ち込みそうな斜面を雪崩を起こさないように、自分が落ちないように気を遣いながらの下りは腰が痛くなる。標高差はわずか100m程度なのに何百mも下るように感じる。
カールの底にたどり着いたところで振り返って見上げると、歩いてきた斜面がギラギラと輝いて異様な迫力。小さな雪崩の跡にオオルリが横たわって死んでいる。よく歩いた、腹も減ったし疲れた。
15時10分、本日のテントサイト千畳敷山荘前（2640m）に到着。吉野が軽い雪盲にかかったほかは何もアクシデントなく到達できた。16時30分にツェルトに入り夕食、19時就寝。
今日は全国的に好天で、沿海州の気圧の谷の影響で日本海側の各地でフェーン現象があったそうだ。この気圧の谷が東進して来るだろうから、明日は天気が悪いに違いない。
小屋の人の話では、中御所谷ルートはまだケーブルカーの工事が終わっていないため通行止めにしてあるそうだ。しかし、今日のルートミスは痛かった。

踏　み　跡　＜　My　mountains　＞

昭和42年5月1日　＜停滞日＞

夜中から強い風と大粒の雨で、目が覚めたり眠ったりの繰り返し。 4時　30分、ツェルトの中も水浸しでどうしようもない状態になってしまったので小屋へ逃げ込むことに決定。風速は瞬間最大　20m余。雨も大粒でものすごい。気温はかなり高く　0度ぐらい。ストーブで濡れた物を乾かした後　7時　30分遅い朝食。

9時の気象通報を聞いて天気図作成。北海道の西の　987mbの低気圧からの寒冷前線が日本海と東シナ海を縦断してアモイの北に至っている。日本の各地は、アリューシャン南方の高気圧の張り出しにより南東風が吹き荒れ、雨または霧になっている。この低気圧は時速60kmで東北東に向かっている。24時間後にはウルップ島付近だろうか。とすれば明日の午前中は多少前線の影響が残るかもしれない。

貴重品の乾燥を終わったところで昼食としてチョコレートと煎餅。停滞日はつらい、食料の関係もあってじっとしているしかない。動くと腹が減るので、午後から一時間半ほど昼寝。

雨はさらに大粒になり、時折氷の粒が落ちてくるようになってきた。大阪から一人で来たと言う男と退屈しのぎの山談義をはじめることになった。大阪からだと夜行で四国や中国の山へも足が伸ばせるし、東京より行動範囲が広いらしい。四国の石鎚山と比良山塊を勧められた。比良は興味がある、行ってみたい山だ。こういう話は興奮するので腹が減る。

16時の気象通報が示す正午の天気。北海道の低気圧は985mbになり、中部山岳と淡路島付近にも小さな低気圧ができて、前線は日本列島をなめるように走っている。北海道の低気圧からの寒冷前線はすでに300～400Km にわたって閉塞しており、前線が大陸の高気圧に押されていることがわかる。今日午後から風が強くなってきたのは、低気圧と気圧の谷の移動によるもので、夕刻より気温が下がったのは寒冷前線の通過によるものだろう。

天気図の作図が終わったところで17時30分から夕食。運動不足のせいかすぐに満腹になってしまう。おまけに筋肉が欲求不満でだるい。

19時、シュラフに入りラジオを聞く。ニュースによると、下界は大分暑かったらしい。遭難のニュースはない。無茶をする人はいなかったということだろう。

雨は上がり、カールを囲む前岳と宝剣岳が見えてきた。小屋の窓から駒ヶ根の灯りが花畑のように見える。激しい雨の後、谷の雲が切れて町の明かりがきらきらと輝き、今日一日の身もだえするような退屈な停滞の後だけに、私も吉野も大阪から来た男も子どものように興奮して感激した。この景色を眺めただけで安らかな眠りに着けそうな気がした。

昭和42年5月2日　＜千畳敷→駒ケ岳→一丁ケ池＞

起床3時30分。朝食を済ませ小屋代（500円）を払って、アイゼン、オーバーシューズを着けて5時10分出発。

カールの雪はカチンカチンに凍ってしまってアイゼンにお誂え向きと言いたいのだが、コルの直下の鼻つき八丁の登りでは所々にブルーアイスまで出てくる状況。

時々ピッケルにつかまって股覗きをすると、カールの底の赤い屋根が深いところに小さく見えて怖くなる。中岳のコルから宝剣をピストンしようとしたがクラストがひどく、ザイルがないと危険と判断し中止。（上写真：宝剣岳を望む）

雪の中に沈んでしまった宮田小屋にキスリングをデポして、サブザックで駒ケ岳をピストン。（左写真：駒ヶ岳山頂にて）

木曽駒ヶ岳（2956.3m）7時10分。眺めは値千金とまで言い切ってもよさそうな素晴らしさ。遠く恵那山と飛加越国境の

山々、そして北アルプスの右に海谷山塊と妙高山群だろうか。南アルプスも果ては光岳、加々森山まで一峰一峰を読み取ることができる。7時20分出発。
<右写真：木曽駒ケ岳頂上にて>
駒ケ岳から木曽口を下って木曽前岳（2826m）もピストン。木曽前岳まで来ると予想以上に迫力のある麦草岳にまで足を伸ばしたくなったが、これは止めて9時05分頂上に戻り今度は北へ足を運び、馬の背を通り将棋頭山へ。伊那の谷から見ると馬の雪形が見られるという斜面はちょうど良い具合に雪が融けて、何となく馬のような黒い物が感じられる。

（右写真：左から伊那前岳・宝剣・中岳・馬の背・駒ケ岳
　　将棋頭山から撮影・下界から見ると馬の雪形かも）
将棋頭山（2730m）10時。頂上で昼食をとり、10時35分迄休憩して景色を味わう。荷物をデポしてある宮田小屋へ向かう。濃ケ池も雪に埋まってきれいなカール状になっている。
12時10分、デポ地点に帰着。もう雪が腐り始めている。
軽食の後12時30分伊那前岳への稜線に入る。
今日は一丁ケ池あたりで泊まることに決定。伊那前岳（2911m）の通過は、強い日差しで目が痛いのと雪の腐りとでかなり苦しかった。三月の甲斐駒の下りと同様足元が不安定なため腰が疲れる。
14時10分、一丁ケ池付近（と言うのも雪に埋もれてしまい池がわからないから）に到着。ここは 2392m、雪が柔らかいうちにと思い、樹林の中の平坦地を選びスコップとコッヘルで雪を1mほど掘り下げ、ツェルトを設営。横の平坦地には六人用のウィンパーが張ってある。どうやら先客があるようだ。おやつを食べながら16時の気象通報。もう文句の言いようのないいい天気。いまさら天気図の解説は不要。
今宵の宿は素晴らしい。目の前の南アルプス連峰と夕日に染まる空木岳。空木岳の白い肌が段々に紅くなり、そして段々に暮れて黒くなっていく。千畳敷から駒ヶ根の灯りが見えた時と同様の素晴らしさ。
17時夕食、18時シュラフイン。風はまったくない。目が雪盲で痛い。瞼まで腫れ上がってしまい、近くの物は霞んでよく見えない。薄日だったため油断して午前中はゴーグルを着けなかったのがいけなかった。
今日で山行150日目、早いものだ。そして 「オレモ　ダイブ　トシヲトッタナ」 ということでもある。

昭和42年5月3日　＜一丁ケ池→大田切発電所→駒ケ根→帰京＞

憲法記念日。3時、寒くて仕方がないので起床。寒いだけあって星空が実に見事。月は弓張。
下山日だからガソリンも贅沢に使える。ゆっくり朝食をとり、食後の休みまでとった後、5時45分からパッキングに取り掛かる。
瞼の裏がゴリゴリして痛い。空木岳と池山尾根の堂々たる大きさにいまさらのように驚く。空木岳は中央アルプスでは一番の山だと思う。チラリチラリと横目で景色を楽しみながらパッキングを終了。6時10分出発。雪は清水平（2009m）で消えてしまい久しぶりの土の香りと感触が懐かしい。
蛇腹沢の水場で早めの昼食。早目と言って恥ずかしくない早さだ、時計を見ると　8時を過ぎたばかり。ラーメンとチョコレートとおやつのフルコース。登ってきたパーティにコースのアドバイスをしてやったらお礼にタバコをくれたので、こちらからもチョコレートの残りを差し入れ。これで我々の

手持ちの食料はカラになった。
地蔵平が近くなるにつれて千畳敷と周囲の景色がパノラマのように広がってきた。そして何よりも我々を喜ばせたのは極楽平の下に鮮やかに見える島田娘の雪形。千畳敷から見た駒ヶ根の灯りと空木岳の夕焼けに次ぐ三つ目の感激の光景。一昨日の豪雨で雪が融けて、ちょうど良い加減になったと思われる。若芽が出揃った唐松林の向こうに、すらりと長いうなじを見せて髪にはかんざしまで着けている。しばし佇み、雪形に見入るひととき。（右写真：島田娘の雪形）

さつきあめ（五月雨）島田娘も出でにけり
うぐいすも島田娘に声をかけ

さらに下りながら振り返ると木曽殿越、空木岳、雪をべったりと付けた大田切本谷のギラギラした輝きも。
桜満開の大田切発電所に11時に到着。バスの時間の都合で駒ヶ根橋までさらに15分。
終着駅駒ヶ根橋に11時20分に到着。橋からの眺めは最高。桧尾岳、サギダルの頭、宝剣岳、千畳敷、伊那前岳、それに島田娘。河原は地元の親子連れや若者達が春の休日を楽しんでいる。目を東に向ければ、仙丈・北岳・荒川・赤石・塩見と南アルプスの3000m峰がどっかりと立っている。
12時20分発のバスは空いていて、乗客は山から下りてきた人も含めて10人程。（バス50円・荷物25円）
車窓の景色でまたまた喜ぶことになった。伊那谷に向かって下っていくにつれて、塩見・荒川・赤石・聖が段々大きくなり、そして前衛の山に隠されていく。はらはらするようなスリルある眺めを楽しむ車窓に、立派な鯉のぼりが立ち並ぶ農家の家並みが絶え間なく入ってくる。
駒ヶ根駅12時50分、駅前食堂で久しぶりの米と味噌汁の昼食。駅からの眺めは東に赤石山脈、西に木曽山脈。これが伊那谷の旅の面白さと言える。13時17分発の飯田線で辰野へ。
伊那言葉の氾濫する車中、お百姓さんやおじさん、おばさんが問いかけてくる。そして我々の応答に驚異の眼で、「東京から？」「西駒へ？」「テントで？」「雪の中？」。地元の人達にとって西駒は眺めているだけで充分な存在なのだ。それをわざわざ東京から来て、テントを持って、雪の中を登る我々が驚きなのだろう。
辰野着14時17分。乗り換えの時間が一時間半できたので天竜川の川岸まで散歩にでかけて見た。気温が27・8℃という暑さなので、アイスキャンデーを舐めながら空木岳をスケッチ。
辰野発15時55分の高尾行に乗って、この山旅は閉幕となった。高尾着は21時29分。
今回の山行を振り返って・・・、天気図作図により予測の立つ行動ができたこと、野菜の摂取が難しい冬山にホウレンソウを茹でて持っていくことを試してみたこと、この二つは充分な成果があった。天気図によって先を予測しながら行動することは、今回のように余分な食料を持たずに行くという経済性にもつながった。
勿論これがどんな山行にも通用するとは思わないが、今回に限って言えば、これらが益となったことは確かである。

以上

（修正・更新：2023年11月）